映画と演劇の批評文における記述対象の計量的比較

Quantitative Analysis of Description in Critiques about Movie and Theater

村井源^{1*}, 川島隆徳, 工藤彰

Hajime MURAI, Takanori KAWASHIMA, Akira KUDOU

^{1*} 東京工業大学大学院社会理工学研究科

Department of Value and Decision Science, Tokyo Institute of Technology

〒152-8552 東京都目黒区大岡山 2-12-1-W9

E-mail: h_murai@valdes.titech.ac.jp

評判分析などが自然言語処理技術によって進められているが、対象は主に Web 上のテキストであり、人文的な批評文はその主たる対象となっていない。本研究では人文的な批評文の具体的批評対象を計量化することで、批評行為のより深い意味分析に向けての基礎固めを行う。本研究では批評文中の人名と作品に絞り、総合的作品である映画と演劇の批評において、誰についてどの作品について中心的に語られる傾向があるのかを計量し、カテゴリー分類と共起分析を行った。結果として演劇批評は集中的であり、映画批評は分散的・個別的であること、また演劇批評は強い芸術的指向性を持つことが明らかになった。

Although reputation analyses have been developed by utilizing NLP technology, such studies focus on texts on the Web. Critiques of humanities are not seen as main target of those analyses. The purpose of this research is to found a basis of profound semantic analysis of critique. It will be realized by applying numerical analysis to objects of critiques of humanities. This paper focused on names of person and titles. Categorization and co-occurrence analysis were executed about that "who" and "what title" are frequently mentioned in critiques of movie and theater. As a result, critiques of theater are concentric but those of movie are individual. Also as for critiques of theater, the consciousness of art is strong.

キーワード: 批評文, 映画, 演劇, 計量分析

Keywords: critique, movie, theater, numerical analysis

1 はじめに

Web 上の Blog や商品 review などの大規模なテキストコーパスに対して、テキストマイニングの手法を用いた計量的な分析手

法の研究が近年盛んになってきている[1]. しかし多くの研究における目標はマーケティングに向けての対象商品評価の効率的な抽出が中心となっている. 一方で文学, 音楽, 映画, 演劇などの様々な芸術分野に対

し、長い歴史を持つ高度な批評の文化が構築されてきているが、これらの人文学的に高度な評価テキストの計量的な分析はあまりすすめられていない。本研究では物語・美術・音楽・パフォーマンスなどの要素を含む総合的な芸術である映画と演劇の評論テキストを電子テキスト化して比較し、その批評対象の傾向や相違を計量的に分析する手法の確立を模索する。

2 本研究の目的

批評文の計量的分析の最終的な目標は、人間の評価の機械的で科学的な意味分析であると考えられる。しかし人文学的な対象における批評文では、高度なレトリックが多用されるため、作品に対して肯定的か否定的かというような単純なレベルの分析であっても精度の高い特定が困難であることが予想される。

そこで本研究では、まずある個別の批評文が何に対して批評を行っているか、批評の具体的な対象を計量化することで、より深い意味分析に向けての基礎固めをすることを目標とする。ある批評文の全体、あるいはさらにその中の小部分である段落や文が何に対しての批評かを特定し計量的に扱えるようになれば、批評文の持つ全体としての論理構造や、ある対象において注目されるべき点とそうでない点の相違などの計量的な特徴が分析可能になると考えられる。また、今後計量的なレトリック分析が進展すればどの対象に対してどのような評価を下しているかの分析も精度よく可能になると期待される。

批評対象の抽出にもさまざまな切り口が考えられるが、本研究では批評文中に出現する人物と作品に絞る。映画と演劇の批評

においては誰について、どの作品について中心的に語られる傾向があるのかが明らかになれば、映画・演劇における人物の位置関係や背景にある価値観の傾向が計量的に示せる可能性がある。

3 分析の対象

本研究においては、さまざまな批評の中で総合的な表現を扱う映画と演劇を取り上げ、どのような要素が批評の対象となりうるかを検証する。映画と演劇の評論テキストとしては、各分野で非商業系の評論として定評のある『映画芸術』[2]『シアターアーツ』[3]を取り上げる。対象巻号はそれぞれ、『映画芸術』が374号(1995年)から430号(2010年)、『シアターアーツ』が1号(1994年)から41号(2009年)である。対象巻号の内、基本的に一つの作品について批評する連載記事のみを選択し、『映画芸術』では604記事(テキストで2.1MB)、『シアターアーツ』では256記事(同1.4MB)を電子化した。

4 頻出人名・作品名の抽出

得られた電子テキストに対して、映画・演劇それぞれの専門用語と固有名詞の辞書(約9000語)を作成し、Mecab[4]を用いて形態素解析を行った。なお、映画・演劇・書籍等の各タイトルは固有名詞として登録した。

また辞書と別に、各批評文コーパス中で言及される各作品に監督・演出・脚本等に関わった制作側スタッフのデータベースを作成した。データ化された作品は映画批評で1636タイトル(内批評対象タイトル604)、演劇批評で671タイトル(内批評対象タイトル256)である。作品と関連する人名として登録するのは、各作品に対して批評文コーパ

ス中で言及された人物に限定した。なお、映画批評ではこれに合わせて、「キネマ旬報映画データベース」[5]より抽出した各タイトルのスタッフと出演者データを追加した。

また、上記のタイトルと関連する人名のデータベースに含まれない各人物に対して、映画・演劇・音楽・美術・文学・思想・マンガ・その他著述業の、主に関係する分野のタグを付与しカテゴリー化した。ただし、原作・音楽・主題歌等で作品データベースに名前が含まれる人物は、その主たる業績でカテゴリー化を行った。(文学者が映画の原作を書いた場合には文学のカテゴリー)

4.1 批評文の頻出人名・タイトル

抽出された映画評論中の頻出人物名を表1に、タイトル名を表2に示す。なお、表中の頻度は単純な出現数ではなく、単語の出現した評論数を用いた。これは、特定の評論中で人名・タイトル名が評論者に連呼されることで頻度が上がる影響を排除し、映画評論全体の中で普遍的に影響のある人物名・タイトルを抽出するためである。

表1 映画評論での頻出人名

頻度	人物名	頻度	人物名
17	黒澤明	9	浅野忠信
17	北野武	8	鈴木清順
13	小津安二郎	8	タランティーノ
13	ゴダール	8	大島渚
11	ヒッチコック	8	阪本順治
11	役所広司	7	田口トモロヲ
11	荒井晴彦	7	イーストウッド
11	黒沢清	7	フェリーニ
10	神代辰巳	7	新藤兼人
10	竹中直人	7	相米慎二
9	青山真治		

表2 映画評論での頻出タイトル

頻度	作品名
8	『シュリ』
5	『オアシス』
5	『スピード』
5	『仁義なき戦い』
5	『回路』
5	『ミリオンダラー・ベイビー』
4	『サイコ』
4	『悪い男』
4	『うなぎ』
4	『殺人の追憶』
4	『南京の基督』
4	『トカレフ』
4	『御法度』
4	『羊たちの沈黙』
4	『ピリケン』
4	『ニュー・シネマ・パラダイス』
4	『ミスティック・リバー』
4	『猟奇的な彼女』

同様に演劇評論中の頻出人物名を表3に、タイトル名を表4に示す。表中の頻度は単語の出現した評論数である。

表3 演劇評論での頻出人名

頻度	人物名	頻度	人物名
19	シェイクスピア	9	清水邦夫
18	蜷川幸雄	8	KERA
14	ブレヒト	8	太田省吾
13	チャーホフ	8	前田司郎
13	平田オリザ	8	深津篤史
11	松田正隆	7	栗山民也
11	土方巽	7	ピナ・バウシュ
11	野田秀樹	7	別役実
10	唐十郎	7	三島由紀夫
10	鈴江俊郎	7	鈴木忠志

表4 演劇評論での頻出タイトル

頻度	作品名
12	『ハムレット』
12	『三人姉妹』
7	『ハムレットマシーン』
7	『マクベス』
6	『ゴドーを待ちながら』
5	『リア王』
5	『ロミオとジュリエット』
5	『三文オペラ』
5	『蝶々夫人』
5	『かもめ』
4	『坂の上の家』
4	『海と日傘』
4	『S 高原から』
4	『パンドラの鐘』

映画批評は演劇批評の倍以上の数があるが、表1・3を比較すると上位の人物の出現批評数は同程度である。つまり演劇批評は、特定の人物に対し集中的に語る傾向を強く持つ。この傾向は言及批評数の多い作品(表2・4)でさらに顕著で、演劇批評では特定作品が集中的に取り上げられると言えよう。

表5 映画評論での批評対象作品頻度

頻度	人名	頻度	人名
6	クリント・イーストウッド	4	望月六郎
5	ヴィム・ヴェンダース	4	瀬々敬久
5	阪本順治	4	富永昌敬
4	石井隆	4	キム・ギドク
4	諏訪敦彦	4	行定勲

表6 演劇評論での批評対象作品頻度

頻度	人名	頻	人名
11	KERA	6	土田英生
10	蜷川幸雄	6	平田オリザ
9	チェーホフ	6	深津篤史
9	野田秀樹	6	岸田國士
8	シェイクスピア	5	柴幸男

原因としては、上演品目自体が特定作者の作品に集中しており、それらの作者・作品に対する批評が多いことが考えられる。自身の携わった作品(作・演出・監督)が批評対象になった頻度を映画・演劇で確認すると(表5・6)、演劇は批評対象の上位が頻出数でも上位であると確認できる。

4.2 人物のカテゴリー

各評論で出現する人名をカテゴリーに分類した結果を表7、表8に示す。

表7 映画評論での出現人名のカテゴリー分類

	回数	人数
映画関連	2336	1488
演劇関連	11	9
文学関連	158	118
音楽関連	93	73
思想関連	49	27
美術関連	17	15
その他文筆	5	5
漫画関連	48	37
その他	6	4

表8 演劇評論での出現人名のカテゴリー分類

	回数	人数
演劇関連	1160	769
映画関連	29	25
文学関連	76	59
音楽関連	43	32
思想関連	40	25
美術関連	15	14
その他文筆	8	7
漫画関連	1	1
その他	2	2

図1 映画評論での出現人名の共起ネットワーク

図2 演劇評論での出現人名の共起ネットワーク

表7・8より批評中の人名は、映画批評中での映画関連人名が演劇批評中での演劇関連人名に対して倍程度ある。同様に各批評中の文学・音楽関連人名も倍程度出現している。一方、美術・思想は同程度の出現数であり、相対的に演劇批評の方に出現比率が高いと言えよう。逆にマンガ関連の人名は映画の方が圧倒的に多くなっている。

4.3 人物の共起関係

映画・演劇各評論中での人物の共起関係をネットワーク化したものを図1・2に示す。図は出現頻度3以上、共起回数2以上での最大部分連結グラフとなっている。

図より、映画では上位の3人（黒澤・北野・小津）が分散しているが、演劇では密接している（シェイクスピア・蜷川・ブレヒト）ことが分かる。演劇は作品数も少なく、古典を上演する傾向が強いため作品間や人間間の密接性が強く批評に表れているものと考えられる。

5 結論と今後の展望

演劇批評は映画批評に比べて、特定作者の特定作品に対して集中的に言及する傾向がみられる。これは主に演劇自体が特定の作品の上演に集中している傾向に強く影響を受けていると考えられる。また、これらの演劇での重要な作者間には、批評文中にも密接な関係性が表れている。これらより演劇批評は集中的であり、映画批評は分散的・個別的であると言えよう。

また、他の分野との関連では映画・演劇いずれも文学と音楽との関連が深く、それらの要素を含んだ総合芸術としての批評が行われていることが分かる。これら他分野の言及される比率も映画・音楽で同程度で

ある。一方で、演劇が思想や芸術に対してより多くの言及を行うのに対して、映画はマンガに対する言及が多い。これは映画に比べて演劇が思想的な背景を強く意識した芸術を志向していることに対して、映画はポピュラーカルチャーであってマンガなどを積極的に原作として取り込みつつ発展をしてきた点が表れていると考えられる。

今後の課題としては、得られた人物間の関係性や映画と演劇での相違の詳細な分析を行うことでより深い批評の意味的な特徴を抽出しうると考えられる。また特定作品への批評文中に表れる他作品や、他分野の人物への言及の分析を行うことで、批評文のパターンを発見しうると期待される。

謝辞

本研究は科研費「知識共有のための価値指向型オントロジーの多分野多言語化」(20300074)および「レトリカルデータベースシステムの構築による計量的修辞分析手法の確立」(22700256)の助成を受けた。

参考文献

- [1] 奥村学: “ブログマイニング技術の最新動向”, 電子情報通信学会誌, Vol. 91, pp. 1054-1059, 2008.
- [2] 荒井晴彦: 「映画芸術」, 編集プロダクション映芸, <http://eigageijutsu.com/>.
- [3] 国際演劇評論家協会日本センター: 「シアターアーツ」, 晩成書房, <http://theatreart.exblog.jp/>.
- [4] 工藤拓: Mecab, <http://mecab.sourceforge.net/>.
- [5] キネマ旬報社: キネマ旬報映画データベース, <http://www.kinejun.jp/>.